

関係性の未来

世界の果てまでも
キャンドルを灯す旅

Candle JUNE

ジャーナリストではない。
ボランティアでもNPOやNGOでもない。
しかし、彼は国内外の紛争地や被災地をめぐる旅を続けている。
自らが制作したキャンドルに火を灯し、平和を祈願する旅だ。
名づけて「キャンドル・オデッセイ」。
彼の名はCandle JUNE(キャンドル・ジュン)。
5年目を迎えたニューヨーク「グラウンド・ゼロ」から
戻ってきたばかりの彼が、これまでとこれからの旅のことを話してくれた。



<http://www.candlejune.jp/>



長崎市浦上天主堂の平和祈願ミサ (2006年8月9日) ©Takeshi Hashimoto

Candle JUNE

キャンドル・ジュン Candle JUNE

キャンドル・アーティスト。1994年にキャンドルの制作を開始。1997年、ギャラリーやサロンなどで展覧会を開催。その後、ファッションショーや野外イベント、ライブステージ、レセプションパーティのデコレーションなど、キャンドルを中心とした空間演出を手がける。2001年に広島で開かれた「聖なる音楽祭」をきっかけに「キャンドル・オデッセイ」と呼ぶ、国内外をめぐって火を灯す旅を開始。ニューヨーク、アフガニスタン、中国、ロンドンなど世界各地で火を灯している。2005年11月直営店「ELDNACS(エルドナックス)」(東京都渋谷区)オープン。

身近なところから

ニューヨークのグラウンド・ゼロで火を灯して帰国したばかりのジュンさんは、今年の様子を次のように語る。

「いつもなら、生きている人と亡くなった人とのコミュニケーションをはかるために一人で祈りながら朝までローソクに火を灯すのですが、今回は友人が参加してくれたり、友人が声をかけて人を集めてくれたり、また遺族の人が来て一緒に朝まで過ごしたり、通りすがりの人の何人かは『ありがとう』と言って握手してくれたりしました」

2001年から国内外の紛争地や被災地へ出向いて、自らが制作したキャンドルに火を灯す旅を始めた。昨年に続いて今年も終戦記念日の8月15日に中国・チチハルの教会で火を灯した。

「チチハルには旧日本軍が遺棄した化学兵器によって、いまだに被害を受けている人がたくさんいます。謝るべきことは謝り、これから友好な関係を築いていきたいんだという思いを込めて、ローソクに火を灯し、沈黙する。そうすると中国の人も祈りに集中できるんです」

ジュンさんは世界各地を巡っているが、世界を見渡す眼とともに自分の暮らす環境もきちんと捉えている。

「祈りは自分とみんなのためにやるんだけど、自分の幸せって何かと考えると、近所の人や友人や家族が幸せにしてくれること。彼らにトラブルがあれば悲しいし、彼らが楽しいと幸せな食卓にも呼ばれる。そういう身近なところから始まるんです」

生きるべきか、死ぬべきか

「小さな頃から、どうして自分は生きているんだろう、という問いがずっとあった」

ローソクをつくりはじめたきっかけは、自身のアイデンティティーや存在理由を自問自答することから始まった。

「小さな頃、お前たちが大人になったころは世紀末だ、と大人に言われました。気がつけば、常にマイナスのイメージばかりの未来。ずいぶん未来は暗いと思いながら、10代は生かされていました。」

一人暮らしを始め、肉体も精神も時間も食えることや住む場所を得るために費やすようになったときに、それらがどれほど自分にとって大切なのかを考えざるを得ない状況ができ、改めて考えたいんです。生きるべきか、死ぬべきか…。死ぬという選択肢もある。そこから考えてみよう、と」

そうしてジュンさんは、自分の時間を部屋で音楽や照明などに凝ることに傾けた。

「そのときのアイテムとしてローソクが一番合っていたんです。いろんなものをシャットアウトして、自分の引き出しの中に入っているものを全部整理する時間が必要だったんです。そのときのパートナーがローソク。ほぼ無意識でつくっていました。必要だからつくっていたんです」

それでも、生きる意味を自問自答し、葛藤が続いた。

「いろんなことがあり、ようやく“生きる”という選択肢が残りました。ここからは簡単でした。あとは意味のある、やるべきことを早くやっつけてしまえば死が訪れる。早く死ぬためにやるべきことをやろう、と思ったんです」

幸いなことにジュンさんには、ローソクでコミュニケーションする方法があった。

「ローソクは人にあげやすいし、溶ければ残らない。いろんなシチュエーションでその人の時間を演出することにもなる。ローソクは表現のできるパートナーで、いまだにいろんなことを教えてくれる先生でもあり、コミュニケーションの道具でもある。でも、これで食っていくつもりはなかった」

ジュンさんは、キャンドル制作が仕事になっていく過程を振り返る。

「あれもこれもしよう、という感覚が自分には欠落しているようです。自分は凡人だと理解しているから、あれもこれもでなく、ローソクをつくって灯すことだけにしようと思ったんです。そしてイベントや飲食店で灯したり、人にあげたり、売ったりしていました。ときには相手が持っているものと物々交換しました。」

不思議なことに生活がギリギリ

になると、必ず誰かが買いに来てくれました。そしてどうしても自分がしたいひとつの

ことだけに集中

していけば、

食っていく

ことだけは

できると

思いました。

気が

つけば

それが

仕事に

なってい

た…」

自分にできること

のちに「キャンドル・

オデッセイ」と呼ぶ旅のきっかけに

なったのが、2001年に広島で開かれた「聖なる音楽祭」だった。

「音楽祭の演出依頼が届き、とうとう来たか、と思いました。これをやったら、たぶん本当の自分のストーリーが始まるような気がしたんです。どうせやるんだったら、平和の火を灯すまでの工程をも自分のルーツを探す旅にしよう、と。」



「キャンドル・オデッセイ2006」の一部

8/5 広島 原爆ドーム前にて火を灯す

8/9 長崎 浦上天主堂にて行われた平和祈願ミサにて火を灯す

8/15 中国 チチハルの教会にて火を灯す

8/16 中国 チチハルの戦争資料館や慰霊碑の前で火を灯す

9/11 ニューヨーク グラウンド・ゼロにて火を灯す



2006年8月15日、中国黒龍江省チチハル市の教会にて。中央にジュンさんの姿が見える。チチハル市では、旧日本軍が遺棄した化学兵器などによって2003年と2004年に事故が発生している。



多くの人と出会った広島原爆ドームの前、朝日が昇るまで平和の火を灯す(2004年8月5日)。



2003年6月、ジュンさんはアフガニスタンに赴き、学校や村を訪ね、各地で平和を祈る火を灯した。

原爆ドームもただ見るだけでなく、夜通しで火を灯して平和を考えるようにしよう。そうすると多くの出会いがあり、次に長崎にも行くことになりました。あそこへも行きたいという思いより、行った先でまた行かざるを得ない次の場所が見えてきたんです。長崎に行けば、沖縄にも目が向きました」

旅の目的地は、海外へも広がっていった。

「日本を旅し、自分がどうありたいか明確に描いたところ、

9・11が起こったんです。そのとき

の小泉総理のスタンスは、自分が思う日本人像と明らかに

ずれていました。でも、自分が一般人として『小泉

さんは悪い』とか言ったところで、さほど影響力はない。その人を責めるより、まず自分にできることからつなげていこうと考えました」

自分にできること、それが各地に出向き、ローソクに火を灯し、祈ることだった。

「争いの原因は石油の利権や宗教などそれぞれ異なるというけれど、結果はすべて一緒

だということをどうしてみんなクローズアップしないんだろう。多くの人が亡くなり、多くの悲しい家族が生まれている。そのことでまた新たな争いを生んでいることも確か。であればそれを早く学んで、次の争いが起こらないようにしなければ延々と繰り返すだろうと考えました。

出会った人たちが『そんな争いはやめてほしい』と願い、そして自分も被害にあったり、悲しみにくれる家族になる可能性がある、それを止めたい。そして多くの人に、不幸を体験した人たちの経験や思いを伝えたい、という気持ちでニューヨークへも行ったんです」

そして旅が始まる

ジュンさんの旅の軌跡をなぞると、個人でできる活動の幅広さ、自由さが見えてくる。それは彼が旅を通じて身につけていったものなのだろう。

「旅を続けていくと、その土地の歴史や

出会った人々とのコミュニケーションを通じていろいろなことを学び、自分にしか持てない言葉となり、旅を重ねるにつれて自分の言葉で人に伝えられるようになってきています。しなければいけないことを続けていけば、たぶんもっと自然に、より多くの人にメッセージを伝えられるようになるでしょう。それは誰かに指示されてやることではないんです」

これからの旅のビジョンはできている。それは地図の上には描かれていないのかもしれない。

「想像してそうになったら楽しいな、という先のビジョンがあります。それは現在の日本と様子が違うものかもしれない。

もちろん、ローソクを灯したからといって世界が平和になるわけではありません。でも、その行為が大切で、今後どうするかと考えるところから、自分の旅が始まるんです」

Text by: 倉田 楽

ジュンさんのキャンドルを屋外に持ち出して撮影。炎にもいろんな表情があることがわかる。



ジュンさんの直営店「ELDNACS(エルドナックス)」。キャンドル以外に友人たちのアクセサリーやクリスタルの販売も行っている。